



夜な夜な短歌集 第19巻 2020年 冬号



題「静」

朝

目を閉じて薄明の空吸い込めば氷砂糖の味わいに似て

風の層樹の層鳥の層重ね広がってゆく静かな混沌

カオス

生まれたての世界とわたし今日もまた美しいもの見つめるでしょう

hanak

毎朝、窓を開けてヨガの太陽礼拝をしています。
この季節は寒いけど、気持ち良い数分間です。



はらい

運動はしないむすめがおもむろに朝日を見つめジャージをはおる

はりつめた静かさのなか筆は跳ね半紙にこころの文字をあらわす

「志高く誠実に」と記す 実のはらいのゆたかな重さ

太田青磁 (Sode)

ひれじぶりの参加になりました。

2020年がよい年になるように短歌を楽しんでいこうと気持ちをもちます。



通勤電車

発車します扉を閉めた地下鉄はタクトを上げて一拍を取る

一駅の同志になってぎゅうぎゅうの電車で息を潜めて耐える

事故らしいみんながはっ!と一斉に遅刻しますとスマホをタップ

通勤電車は、実はしずかなのです。

momonga(もも)



今あるもので

脳内の庭に鹿威しを作ろう考えるより先に動こう

キャッチボールで突然下手投げになるように今あるもので楽しめ

侘び寂びはひとまず置いておくとしてご飯のおかず食べる炒飯

ちゃありい

短歌を喜ばせたいよね、短歌を。



白明

絹ずれの音を静かにひびかせて歴史かさねた着物は真白

盃をささげ傾けわたくしの血へ混ざりゆく誓いのことば

永遠のことばの意味は未だ知らず燃える紅葉は光をはじく

serii

燃ゆる、止まる、舞う、静かに光る、静かに燃える、静かに止まる



願
い

いつの日かあなたと逢えるそれだけを私はここでただ待っている

願うことと祈ることは同質で同等の価値を内包する

温かいあなたの側で過ごすこと当たり前がすごくありがたい

静こしてひと軒がすこしとまどわる言葉。

だからこそ詠み人の本質が見えるようなそんな気がした。

m
a
s
a



ワイヤレス

イヤホンのナンバーガール爆音でペンの音すらしない 静かだ

野良猫はどうしているか榛の木が大きikutたわむたぶん強風

じわじわと大根を煮る火は青い君の煙草は赤く瞬く



ふみ

すいません。今回もボロボロです。

著者近影

胸懐

抱きしめてほしがること減ってゆき役目のおわりを噛みしめる日々

汽水域をいきつ戻りつする吾子の背中にしみじみ願う幸い

「これからは自分の時間を大切に」父からのことば胸へと仕舞う

雪（永山 雪）

大丈夫。踏み出していいんだよ。



silence

フロントに当たる雨音大きくてきみの眠りが覚めなきやいな

気にしてないつもりだったよ喧騒が白く潰されやけにうるさい

初日の出のほんの一瞬前みたく静かに送れ最初の1秒

七色一味

サイレンとサイレントとサイレンス静かは意外と五月蠅いらしい



冬の点描

粛々と青いレールを組み替えて今日も続くよ静かな工事

「あつ、ゆきがふっているよ」と天窗を見上げて止まる静かな暁毛

一生に一度しかない六歳のあなたがくれた冬の点描

冬の属性は静だと思っ。

れいぽ



初雪

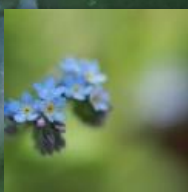
雨の中今年最初の月詠を投函したり筆名変えて

雨音がいつか途絶えて震から雪へと変わる睦月のしじま

ゆきやなぎのしなやかな枝に一輪の開花を見た日初雪となる

みちくさ

大相撲初場所を堪能させていただきました。
緊張のたちあいを誰か詠んでくれたかな。



猫が寝ている。

降る雪は消し去るだろうこんこんとこたつの中で猫が寝ている

ぱちぱちと爆ぜる炎を眺めてる囲炉裏の縁で猫が寝ている

去ってゆく赤い灯火救急車ぼくの布団で猫が寝ている

nonたん

寝かしゃんnonたん、静かにしてあげてください。



君待月

静寂も季節の毎に違くって君の不在は冬の静けさ

とどかずにこころのことばはかいのからてにとりしときかえすなみおと

久しぶり噛み締めている沈黙が日向の匂いちよつと気まずい

短歌、(途切れ途切れにしるし)いんなんに続へと思つてなかつた。

まっ、上達ニマは置いといて(笑)

てる



沈黙

音のない夜をむかえてイヤホンが音楽を食べつくしたその日

エレベーターの中で無言になる昼に足を踏まれたこと思い出す

万物と唯一対話できる日に万物からの苦情を浴びる

音のない世界を思いつくのまま表現してみました。



テイ

清く正しく潔く

やりきってしまったえばなんてことはなくこれがほんとの暮らしと思う

ゆっくりと片腕外してゆくように諦めもまた心地好くて

これからは何もいらぬ自分だけ夢と希望はきみに任せた

必要最低限の愛です。

レイ





編集後記

暖かい冬となった2020年。お題は「静」です。冷えた夜明けの静けさ、心の落ち着き、穏やかな時間や暮らしを静として詠んだ歌が多かったように感じます。詠み人それぞれの“静”をお楽しみいただけたら編集人はうれしく思います。

編集秘話を一つ。炒飯をご飯のおかずにする勇気がなくて、麻婆豆腐になりました。

企画・編集・写真 momonga (もも)

(4、7、9、12、14 ページは「photo AC」の皆様より)

夜な夜な短歌集第19巻2020年冬号／2020年2月発行／編集人 momonga (もも)

- 当歌集に掲載されている文章・画像等の無断転載はご遠慮下さい。使用する際は、事前に確認していただくようお願いします。歌集の紹介や読書メーターでのレビューは大歓迎です。
- 『夜な夜な短歌コミュ』とは、読書メーターにあるコミュニティです。短歌が好き、短歌を詠みたいというメンバーが集まって交流をしています。みなさんも良かったら一緒に短歌を作ってみませんか？ [*夜な夜な短歌人による 夜な夜な短歌コミュをみる](#)